

# 地塩

No.428

2022. 12. 18

目次

発行日 2022. 12. 18  
 創刊 1926. 9. 10  
 編集 蕃山町教会執事会  
 発行人  
 印刷人 山陽印刷(株)  
 発行所  
 岡山市北区蕃山町2-15  
 日本基督教団蕃山町教会  
 TEL = (086)224-1322  
 FAX = (086)224-1329  
 三井住友銀行岡山支店  
 口座 普通 0962358

## 礼拝説教 2022. 10. 2

### 「罪を見逃す神さま」

ローマの信徒への手紙 三章二五〜二六節  
 牧師 服部 修

私は寒いのが苦手です。しかし寒い場所でも行ってみたい所があります。その一つがフィンランドです。理由は、フィンランド式サウナに入ってみてみたいからです。結局寒いのが苦手なので「？」と言われそうですが。フィンランド式ではなくてもサウナが併設されている所に行つたときには、よくサウナに入ります。私は性格的に体育会系氣質を持つているため、例えば私が入ったときに先客がいたらその人が出るまで出ないようにしよう、とか、自分の割とすぐ後に人が入ってきたら、この人より先に出ないようにしよう、とか考えてしまいます。そんなつまらない意地を張ってしまうこともあります。他にも我を張ってしまうようなこともあるのですが、ともかく、変な我を張るようなことは慎もうと考えるとき、我を張らないこと、忍耐することが愛の問題として大切なことに気づかされます。

聖書の中には「忍耐する」という言葉はいくつかあるのですが、ここに用いられている単語は少し珍しい表現となつています。単語の本来の意味としては、忍耐というよりも「猶予」といったニュアンスが強いようです。ですから、何か我慢して忍耐していた、というイメージではなく、行うことを控えること、行ふことを控えているかと言え、裁きを行うことを控えていた、となります。事実神さまはすぐにでも裁くことのできるお方ですし、神さまが「今から裁きを行う」と宣言されたら誰もそれを止めることなどできません。その神さまが忍耐し、裁きを猶予していた。この忍耐・猶予が神さまの愛であることは疑いようのないことです。短気な人間だったら、「もういいや、裁いてしまえ、捨ててしまえ」と口にしてしまつて、神さまは忍耐され、裁きを猶予し、怒りを遅くしてください。とパウロは記したのでした。

この神さまの猶予期間の中で、私たちは傲慢に、自分勝手にふるまいます。すぐに裁かれないからという気になつて、いかげんな信仰生活を送ります。しかしそれは導火線に火の付いた時限爆弾の前で宴を開いているようなものです。もし私たちがそんなことをしている人を見たら、「危ないから離れなさい」と言うはずのことを、私たちは神さまの忍耐の前で行っている。それがここに言われている忍耐、もしくは猶予期間とパウロが表現していることの意味になります。

そして猶予期間ですから必ず終わりの時が来ます。すなわち神さまが裁くのを、怒るのを忍耐していたその期間の終わりの時が必ず来ます。しかし人間はそんなことを知らず、あるいは知つていても何も考えず自分を大事にし、罪を犯し続けてきました。第三者的に見ていたら、「ああ、もうだめだな」と思われる日が近づいたのです。

ところで「トロッコ問題」と呼ばれる問題をご存知でしょうか。簡単に説明しますと以下のようになります。トロッコが暴走して止まらなくなった。このままトロッコが暴走したらその先にいる作業員五人が死ぬことになってしまふ。たまたまあなたの目の前に線路を切り替える分岐器があつて切り替えることが出来る。しかし切り替えるとその先には作業員一人がいる。その時あなたは分岐器を切り替えますか？切り替えずにそのままにしておきますか？という問いです。このトロッコ問題は一人の犠牲と五人の犠牲をはかりにかけます。どちらを助けるのか。切り替えるか否か。もつともどちらを助

けたとしても、人としては後味の悪い結末しかありませんけれど。

パウロは二五節でこのように述べます。「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。」

裁きと怒りの猶予期間が終わろうとして、もうこのままでは人類終了。そう思われた時に、「神はこのキリストを立て、その血によって」と語る。トロッコ問題に重ねて言えば、このままでは人類終了というすんでのところで、神さまは御子を立て、裁きと怒りの矛先を私たちから御子に切り替え、御子の死をもって、今まで人が犯してきた罪を見逃し助けた、と説明したのであります。私たち人間が一生懸命に助けようといと祈ったからでもなく、助かるようにひたすら良いことをしたからでもなく、「あなたを助けたい」という神さまの愛のみが、私たちが救われた理由なのです。神さまは裁きと怒りを猶予してきたばかりでなく、裁きを、怒りを御自分の御子お一人に負わせたのです。なぜパウロが繰り返すこのことを語るのかと言え、すんでのところ、私たちが助け出されたのに助け出されたことに気づかないばかりか、自分の命を助けるために犠牲となってくださったイエスさまを軽々しく扱い、別にお願ひしたわけではない、とばかりに平気でイエスさまを投げ捨てるからです。それでも神さまはあなたの罪を

見逃し、あなたの罪に対する怒りを御子に負わせてくださった。それが神さまのあなたに対する義であり愛です。

神さまが義であること、つまり正しく誠実なお方であることは、あなたを裁く代わりに御子を裁かれたことで分かる。猶予して、待つて、待つて、もう裁くしかないというその時に、神さまはあなたではなく、イエスさまに血を流させて助け出してくださいました。もしかししたら、トロッコ問題で言えば、あなたは何事も起らなかった線路上で、切り替わった線路上であなたが助かるために誰かが死んだことすら知らなかったように、全く気付いていないかもしれない。しかしイエスさまが十字架の上で死なれたことによってあなたは助かったし、あなたの罪は見逃されたのだ、と。

表現上の細かいことですが、二四節では「贖い」、二五節では「償う」という表現が用いられています。かなり大雑把に言ってしまうえば、普段読む分には同じ意味で考えていただいて良いのですが、当然ながら意味合いの差があり、パウロはその差を意識して用いています。つまり「贖い」とは戦争で捕虜となったものを取り戻すための代金、といった用いられ方をします。あなたが自分で代金を支払わなくても、あなたは捕虜の状態から解放されたし、神さまがあなたに対して支払いを請求することは無い、ということが「贖い」が伝えようとしている内容です。対して「償い」は宥めるといった意味合い

が強くなります。怒りに対して宥めるといふ行為がありますが、そのようなイメージです。忍耐してきた、猶予してきた、そして怒りの日が来たそのときに「どうかこれで怒りをおさめてください」といった感じですよ。もっとも、正確に言えば怒るのも神さまですが宥めの供え物としてイエスさまを準備されたのも神さまであって、私たち人間の間からイエスさまを差し出したわけではありませんから、この「償い」という表現においても、すべてを準備してくださいる神さまの無償の愛が表現されていることが分かります。

そしてパウロはこのようにして、滅ぶべきあなたが、ただ神さまの恵みと愛によって救われたのだ、と伝えます。あなたが偉かったからではなく、あなたが頑張ったからでもなく、神さまはただ「あなたを愛したい」「あなたを救いたい」と思われたことによって、怒りの矛先を、裁きの対象を人類から、あなたから切り替えてイエス様お一人に負わせられた。そのようにしてあなたが神無しでも生きられるとこれまで考えていた傲慢から救ってください。あるいは律法を守ってささいれば暴走するトロッコは止まると思っていた大いなる勘違いから救ってください。だからあなたは間一髪助かったことを喜びなさい。あなたの罪がイエスさまの十字架によって見逃されたことを感謝しなさい。そして今もなお罪の中にしか生きられないことを悔い改めなさい。しかしもうあなたは

は助かっているのだから、安心して、心配することなく、信仰に生きなさいと伝えるのです。

顧みれば、私たちは今この時にも神さまに忍耐を強要してしまっているような者ではないかと思わされます。神さまを喜ばせることよりも神さまを悲しませることしかしていないと告白せざるを得ない者でもあります。しかしだからこそ、私たちは贖われた者であり、キリストという償いの供え物をささげた者とされている恵みを思い起こすのです。それこそ我慢できない私の代わりに我慢し、ゆるせない私の代わりにゆるし、愛せない私の代わりに愛し、憎む私の代わりに憎まれる者となってください。イエスさまの救いに基づいて生きられる恵みを喜びたいのです。今もなお罪人の私たちです。しかし私たちは罪を見逃していただいた幸いな私たち、でもあります。それゆえにこの救いに立ち、この救いに生き、この救いを伝えていくために私たちの人生が用いられるようにと祈ってまいりたいと思います。

私たちにはそれを成し遂げるだけの力も知恵もありません。しかし心配には及びません。私の罪を十字架によって見逃してください。私たちが、宥めを通して私たちが助け、私たちが導いてくださいます。神さま助けてください、神さまおゆるしくください、そして神さまありがとうございます、そう祈りながら日々歩む者でありたいと願います。